

フィンランドの高齢者住宅・施設事例から見る日本のこれから

～日・フィンでの居住者アンケート結果を交えて～ <その1>

東北工業大学教授 石井敏氏

成熟社会居住研究会では、東北工業大学教授の石井敏氏をお招きし、フィンランドと日本における高齢者住宅・施設の比較についてのお話を伺い、日本におけるこれからのことについて意見交換を行いました。

(1) 自己紹介

私は建築計画の分野で、高齢者の介護施設の計画・研究に携わってまいりました。20年前にフィンランドに約2年留学したのですが、さらに2012年には大学の制度で、8か月間の滞在研究を行うことができました。日本の介護施設や高齢者住宅のことを研究する中で、フィンランドと比較しながら、日本がどの方向に進むべきかという道標を探しているところです。

(2) フィンランドについて

1) 北欧諸国の中でのフィンランドの特徴

フィンランドは森と湖の国と言われますが、さらに森と湖とサウナの国と言ってもいいかもしれません。北欧諸国の他の国はすべて王国ですが、フィンランドだけが共和国です。人口は約550万人で、首都ヘルシンキの人口は約60万人です。国土面積は日本の本州程度で、人口密度は日本の25分の1ぐらいです。夏は白夜ですが、冬は日が出ないという、非常に厳しい気候です。

フィンランドは他の北欧諸国と同様に、北欧型と言われる社会福祉の仕組みを持っています。北欧を語るとき、日本と社会の仕組みが全然違うために単純な比較はできないのですが、制度や社会の仕組みを越えて見てくる部分はあると考えています。

高福祉・高負担で社会保障をまかなう仕組みの根底に流れるものは、均等な機会を全ての人に提供して、平等な社会の構築を目指すことだと思います。

フィンランドはロシアから独立して100年で、そういう意味では若い国です。また、フィンランド人は日本を、ロシアを挟んだお隣の国と見ていますが、日本でそういう風にフィンランドを見ている人はいないと思いますけども、フィンランドにとってみれば、日本は心理的に親しみのある国で、日本を好きな方が多いし、日本のことをよくご存じです。大事なことはロシアと接している国境がとても長いということです。ロシアに支配された期間が長く、フィンランド人が自分たちのアイデンティティをずっと保ちながら、最後に独立しますが、その観点からもやはり他の北欧と置かれていた状況が全然違います。隣にロシアのあることが日常生活の中でも極めて大きな脅威で、経済的にも今ものすごく大きな要素なのですが、人口500万人ぐらいの小さな国ですから、何かあれば潰されかねない中で、1つの国としてのアイデンティティを守っていることはとても大きなことだと思います。

北欧諸国のフィンランド・デンマーク・スウェーデン・ノルウェーは、共通するところは大きいですが、細かく見ていくとやはり違いがあります。さっき申し上げたようにフィンランドだけは王国ではありませんし、ノルウェーはEUに入っていないです。ユーロを使っているのはフィン

ランドだけですし、軍事的にもスウェーデンとフィンランドは中立を保っていますが、特にフィンランドは隣国のロシアのことなど、他の北欧諸国とは立場が微妙に異なるところがあります。

2) フィンランドらしさ

“フィンランドらしさ”というのを様々な場面を通してご紹介していきたいと思います。写真1は、人が並んでバスを待っているところなのですが、日本だとバス停で待っていれば、バスは停まってくれます。しかしフィンランドではそうはいかないのです。皆がバスの来る方向を集中して見ていて、バスが来ると、一斉に日本のSuicaのようなカードを持って手を挙げるのです。このカードはリフレクターになっていて、夜の暗いときでも光の反射で光ります。誰か1人がカードを挙げれば、バスは停まるだろうと思うのですが、全員手を挙げます。つまり、とにかく自分の意志は自分で表明しなくてはならないということです。これが1つの場面ですけれども、彼らの生きている本質の全てにつながっていると感じます。



写真1：バス停の様子

フィンランドは世界で唯一、原発の核廃棄燃料の地下貯蔵施設をつくっているところです。フィンランドは原発を4基持っていますが、地下500mぐらい掘ってつくった「オンカロ」という施設に、核廃棄燃料をすべて収めるようにしています。フィンランドには地震が無いとか、地盤が非常に硬いといった要素がありますが、原発を持つ以上、妥協しないでここまでしっかりつくります。10万年後の社会の安全ということまで意識して、原発というものを位置づけて、そのための準備をしているということは、フィンランドらしいところです。

写真2は私が家族で住んでいたアパートの、共用ランドリールームです。集合住宅で洗濯機は共用です。みんな家に一台ずつ洗濯機を持っている必要はなくて、合理的と言えば合理的ですね。



写真2：共用ランドリールーム



写真3：共用乾燥室

洗濯機を動かすときは、携帯電話で電話すると自動的に電源が入って、料金は携帯電話から落とされるという仕組みです。人口密度が低い中で、いかに手間をかけずに効率的に物事を動かすかということで、携帯電話やインターネットなど、使えるものは徹底的に使っていくことをやっています。写真3は乾燥室ですが、洗濯したものを下着も含めて乾燥させています。日本だと女性の下着を皆と一緒に干すのはいやだなとなるでしょうが、意外と平気で干しています。

フィンランド人はコーヒーが大好きで、コーヒーの1人あたり消費量は世界でも1、2と言われているのですが、皆が同じコーヒーを買っています。生活の形とか、本当にシンプルな国だなと思いました。果物や野菜は全部量り売りで、自分の欲しいものだけ、量って袋に入れて買うというやり方で、日本のようにプラスチックのパックとか大量のごみができるということはありません。写真5は20年前の写真ですが、スーパーのレジのところに、少し広いレーンがあって、車いすやベビーカーが優先ですよという看板がありますが、日本でこういう配慮というはまだありません。レジのスタッフは大体座っています。立ったままレジをやるのは腰に悪いということです。



写真4：野菜量り売り



写真5：レジ

夏休みになるとヘルシンキの各地にある公園で、このような光景が見られます。夏休み期間も働いている親も多いですから、子どものご飯が問題になるのですが、ヘルシンキ市の福祉サービスで、子どもがお椀をもって公園に来てお昼ごはんが提供されています。これは、夏休みの間ずっと続きます。隣の町から子どもが来ることもあります。どの町から来たとか細かいことは言いません。日本のような、カード見せるとか、もらったらスタンプ押すといった面倒くさいことはやらないのです。



写真6：夏休み ヘルシンキの公園 ①



写真7：夏休み ヘルシンキの公園 ②

フィンランドはムーミンが有名ですが、文学作品としてのムーミンを読むと、フィンランドの自然、社会、人間関係、人の暮らしや考え方が的確に表現されています。10年ほど前の映画「かもめ食堂」でもフィンランドのことが日本でよく知られるようになりました。それまではフィンランドに行く人は建築やデザイン、音楽関係の人だけだったのですが、今は若い女性なども行くようになりました。

3) フィンランドのデザイン

フィンランドのデザインは本当にシンプルで機能的です。煌びやかさやデコレーションを一切そぎ落とした中にあるものが大事で、機能的に実用的に組み立てていく中で、自然環境と調和を図りながら美を追求していく考え方です。デザインとは、誰でも使えるもので、何十年経ても親から子へ継いでいけるものとしていることは、色々なデザインを見ていて感じます。



写真8：フィンランドのデザイン

最近、EU加盟してから大きく変わって、アメリカナイズドされている部分はありますが、フィンランドが持っていた良いものというのはたくさん残っています。フィンランドの建築は北欧の中でも独特で、シンプルで非常に美しい、自然を生かしたデザインです。フィンランドの建築を見て行きますと、フィンランド人が大事にしているものが見えてきます。例えば教会の礼拝堂



写真9：ヘルシンキ中央駅（1919）
エリエル・サーリネン



写真10：(テンペリアウキオ)岩の教会(1969)
礼拝堂 スオマリネン兄弟



写真11：タピオラ 1950s
計画都市・ニュータウン



写真12：ヘルシンキ ロウリュ

は、宗教色が消された、誰でも入って過ごせる空間で、空間が持っている本当に大事なことをシンプルに表現しています。

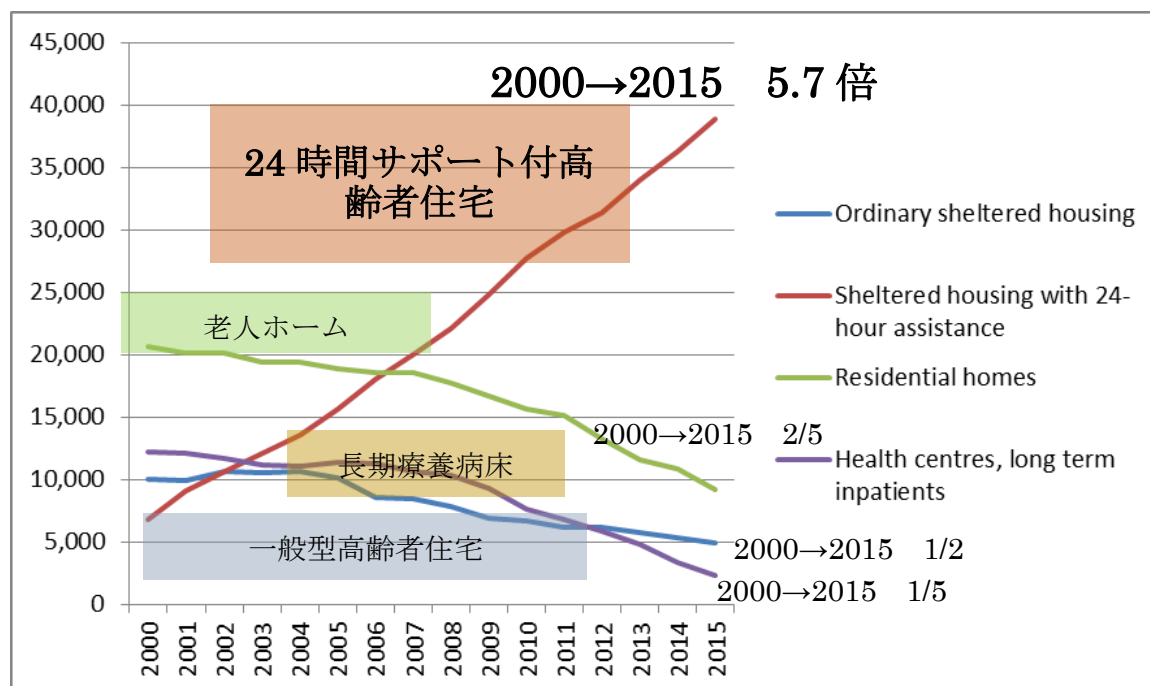
写真 11 は、1950 年代から 60 年代に建てられた、森の中に住むという都市計画の分野で有名な、「タピオラ」という町です。写真 12 は最近のもので、観光名所にサウナとレストランを複合化した建物です。

(3) 高齢者のための住まい

1) 24 時間サポート付き高齢者住宅

フィンランドの高齢者の住まいが目指している方向性は、日本とほとんど変わりません。基本的には在宅で暮らし続けられるようにして、日本でいう介護施設は減らしていくという方向性です。さらに高齢者住宅を整備して、施設を住まい化していくということも目指してきました。他の北欧諸国においても、介護施設は廃止して、住まいの中でサービスを提供しながら住み続けられるような仕組みをつくっていくということを行っています。フィンランドが他の北欧諸国と異なる点は、施設はまだ残していることです。施設は減らす方向性ですが、まだ制度として残しており、それを高齢者向け住宅「サービスハウス」への転換を進めています。

グラフ 1 のように 2000 年から 2015 年までの 15 年間で顕著な点は、24 時間サポート付き高齢者住宅が 6 倍になっていることです。当初の一般型高齢者住宅には、24 時間サポート体制などはありませんでしたが、入居者の高齢化が進み、24 時間サポートが必要になっていくことから、24 時間サポート体制のついた高齢者住宅が増加しました。日本の療養型病床群にあたる、医療施設内の長期療養のための病床は徹底的に減らしています。方向性は極めて明快で、目標を定めながら黙々とどんどん進めています。グラフ 1 から構造の変化がはっきりわかります。



グラフ 1: フィンランド 65 歳以上 各種サービス利用人数 (2000~2015)

2) 目標値の設定

現在のフィンランドで、高齢者に関する議論の中で 65 歳はあまり対象になっておらず、ターゲットは 75 歳以上です。65 歳の方はほとんどお元気で、75 歳以上の人口の数字を見ながら、目標値を定めて政策を進めています。75 歳以上人口の 90%以上が暮らし続けられる住宅を整備していくということが、極めてわかりやすく進められています。

図 1 のように 2010 年の 75 歳以上人口の中で、在宅に暮らしている人はまだ 39 万人と 89.5% を占めます。65 歳から 75 歳で在宅に暮らしている人は 50.5 万人です。つまり、65 歳以上の 89.5 万人くらいが在宅でした。2030 年時点で 65 歳以上の 91~92%が在宅で暮らすということを想定した場合、145.7 万人となります。フィンランド政府は 2030 年には 100 万戸の 75 歳以上高齢者にアクセシブルな住宅という国の目標を掲げています。現時点で 75 歳以上高齢者にアクセシブルな住宅というのは 28 万戸しかなく、残りの 72 万戸が必要として、民間の集合住宅、戸建て住宅、公営住宅を合わせて、32 万戸新築、40 万戸改築のための政策を進めています

ヘルシンキのような都市部では、日本と同様に、エレベーター無しで建てられた集合住宅が多く、エレベーターをつけてアクセシブルな集合住宅とすることが進められています。これは当たり前と言えは当たり前ですが、しっかりやらなければいけないと、国としても大きな方針を立てて進めています。

- 約 100 万戸の住宅が必要
- 現時点でのアクセシブルな住宅は 28 万戸
- これから 20 年で
32 万戸新築 40 万戸改修の必要性

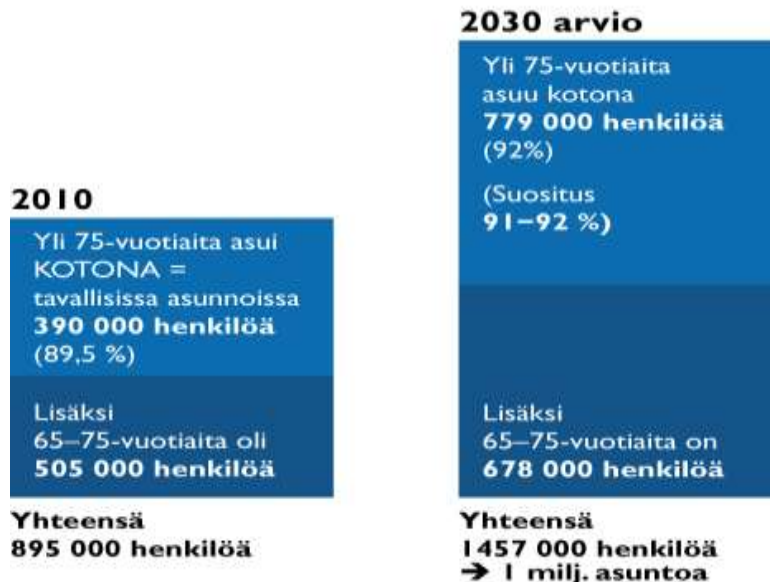


図 1 : アクセシブルな住宅の整備

3) フィンランドの福祉の特徴

フィンランドのスーパーにはお金入れて遊ぶスロットマシンやポーカーがあり、18 歳未満は禁止なのですが、フィンランドスロットマシン協会という北欧唯一のギャンブル事業を独占している機関があります。ここでは収益金を全て保健福祉に還元しており、かつ非営利の NPO などへ

の助成を行っています。北欧諸国の中でのフィンランドの特徴の1つが、高齢者住宅や老人ホームにおいて、自治体が運営している公的なものが少なく、昔からNPOが非常に力を持っていて、サービス提供を進めていることです。その背景にはこの協会の存在がありました。ただ、今年2017年から色々と仕組みが変わりまして、この協会が行っていたNPOに対する助成については、国がつくった別組織が行うことになったようです。

フィンランドの福祉の特徴は、尊厳の尊重、自己決定の権利、プライバシーの権利の保障があげられています。これはどこの国も基本的には同じと思いますが、根底に流れているものは、自立と自律の思想です。フィンランドでは、“サービス”について、お客様をもてなすとかそういう思想はほとんど無く、基本的には自分で生きていくことで、それを必要なところは支えていきますよという姿勢・視点です。ある意味厳しい社会ですね。その辺りは色々な場面を見ていて、一貫して感じる場所でもあります。日本ではサービスを手厚くすることを良いことと評価しますが、向こうでは決してそういうことを求めているわけではないということです。

表1：都市別 運営者別 高齢者住宅・施設

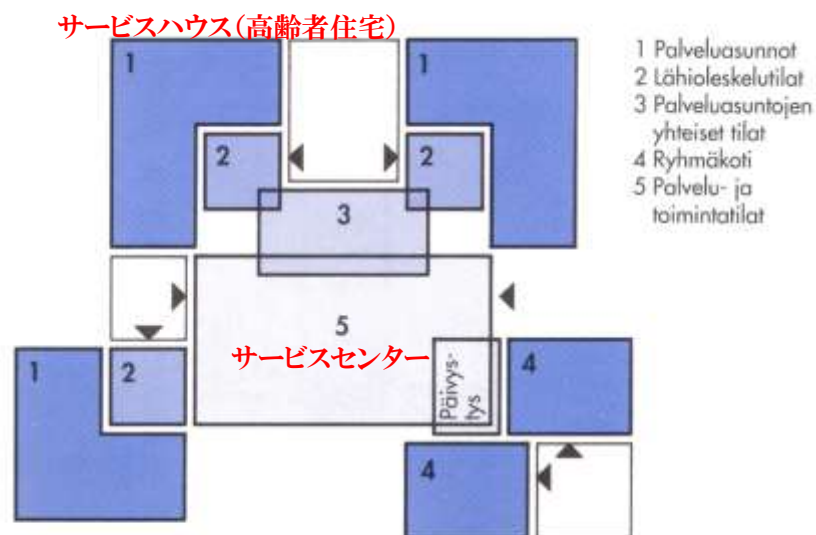
			施設(老人ホーム) + 24Hケア付き住宅		老人ホーム		24Hケア付き住宅		老人ホーム		24Hケア付き住宅	
2010.12.31現在	合計人数	2009年比 増減%	老人ホーム	24Hケア 付き住宅	自治体・ 自治体連 合	民間(企 業・NPO 等)	自治体・ 自治体連 合	民間(企 業・NPO 等)	75歳以上	75歳以上 に占める 割合	75歳以上	75歳以上 に占める 割合
Whole country	44,726	4.5	16,082	28,644	14,351	1,731	13,768	14,876	14,022	3.2	24,434	5.6
			36.0%	64.0%	89.2%	10.8%	48.1%	51.9%				
Espoo	1,072	0.9	302	770	294	8	13	757	219	2.0	652	5.9
			28.2%	71.8%	97.4%	2.6%	1.7%	98.3%				
Helsinki	5,299	7.7	2,300	2,999	1,368	932	1,404	1,595	1,938	4.9	2,576	6.5
			43.4%	56.6%	59.5%	40.5%	46.8%	53.2%				
Vantaa	1,033	-1.0	372	661	257	115	205	456	279	3.2	489	5.5
			36.0%	64.0%	69.1%	30.9%	31.0%	69.0%				
Hämeenlinna	843	9.5	304	539	258	46	102	437	273	4.2	469	7.2
			36.1%	63.9%	84.9%	15.1%	18.9%	81.1%				
Turku	1,587	-2.8	648	939	587	61	225	714	606	3.9	786	5.0
			40.8%	59.2%	90.6%	9.4%	24.0%	76.0%				
Kuopio	509	-5.0	174	335	153	21	32	303	148	2.1	300	4.2
			34.2%	65.8%	87.9%	12.1%	9.6%	90.4%				
Tampere	1,225	8.4	729	496	628	101	0	496	660	4.0	427	2.6
			59.5%	40.5%	86.1%	13.9%	0.0%	100.0%				
Jyväskylä	1,013	8.3	387	626	364	23	332	294	336	4.0	512	6.1
			38.2%	61.8%	94.1%	5.9%	53.0%	47.0%				
Oulu	913	0.4	566	347	495	71	57	290	494	6.0	302	3.6
			62.0%	38.0%	87.5%	12.5%	16.4%	83.6%				

(4) 高齢者向け住宅 サービスハウス

1) サービスハウスの一般的な形

サービスハウスの一般的な形は、地域とつながる機能を持ったサービスセンターを核にしなが
ら高齢者住宅や認知症グループホームを併設していくというものです。住宅の部分、大体 40 m²で、
デンマークやスウェーデンに比べると若干狭いのですが、40 m²は守るべき一つのラインとされて
います。つまり、寝室とリビングが分かれて、トイレがつく住宅の形として 40 m²という数値が出
てきます。さらにベッドルームからトイレに容易に行ける間取りがしっかりと考えられています。
こちらでは 40 m²の住宅 4 戸で一つの共用のラウンジを持つというつくりになっています。

サービスセンターではデイセンターの他、地域の方々や子供たちが使えるプールやサウナ、フ
ィットネスが置かれています。日本でいうデイサービスとは違って、介護のために来るというよ
りは、あくティビティのために来るものになっています。真ん中にサウナがある形が一般的です。
レストランなど、地域の人が自由に食事できる場所も設けています。フィンランドはやはり冬が
厳しいので、汗を流すことはとても大事にされていて、サウナとプールが設けられています。



Kuva 3.
Esimerkki palvelutalon perusratkaisusta tilakaaviona.

図 2 : サービスハウス構成例

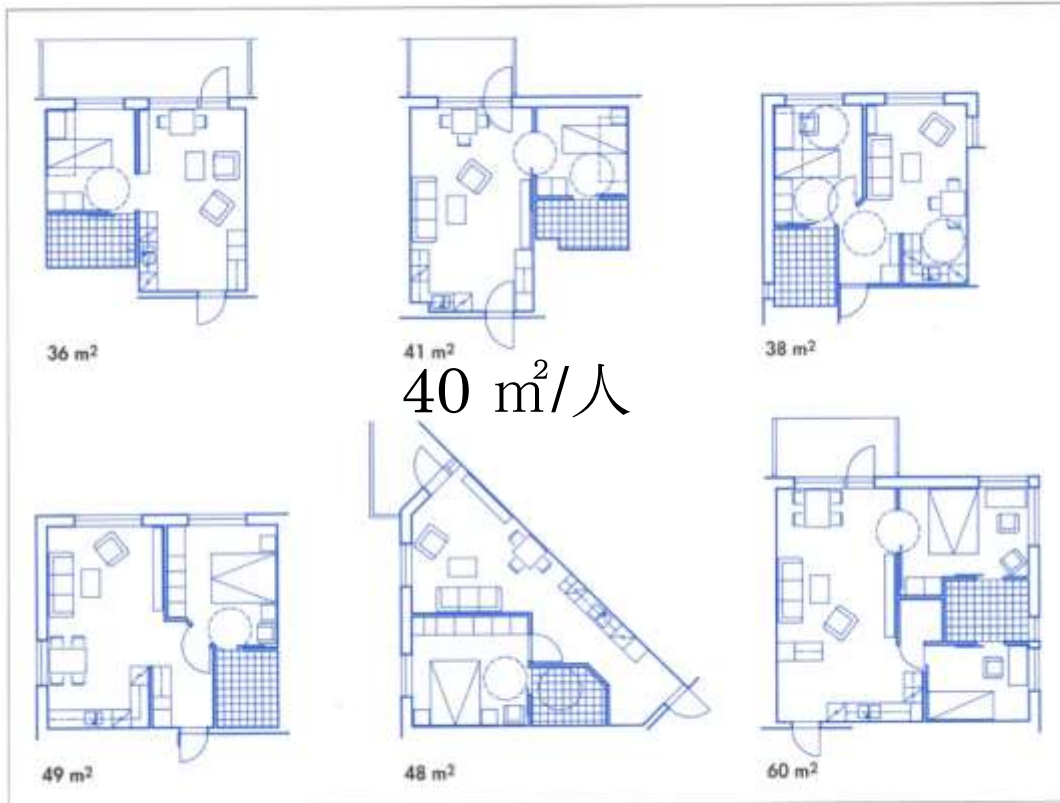


図3：サービスハウス居室面積

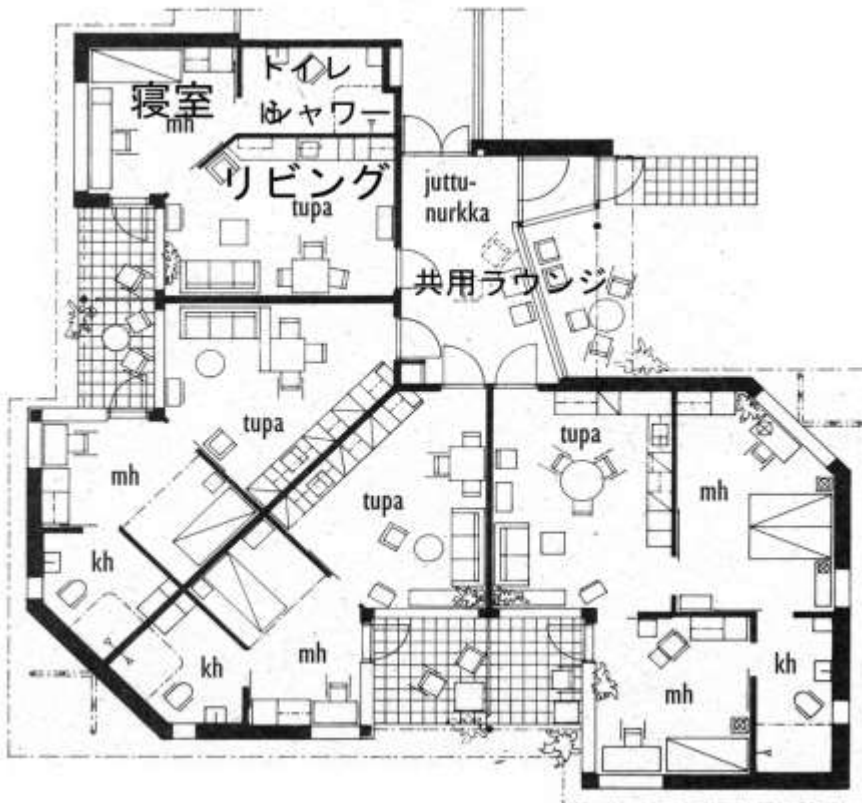


図4：サービスハウス 居室構成例



写真 13 : サービスハウス レストラン



写真 14 : サービスハウス プール



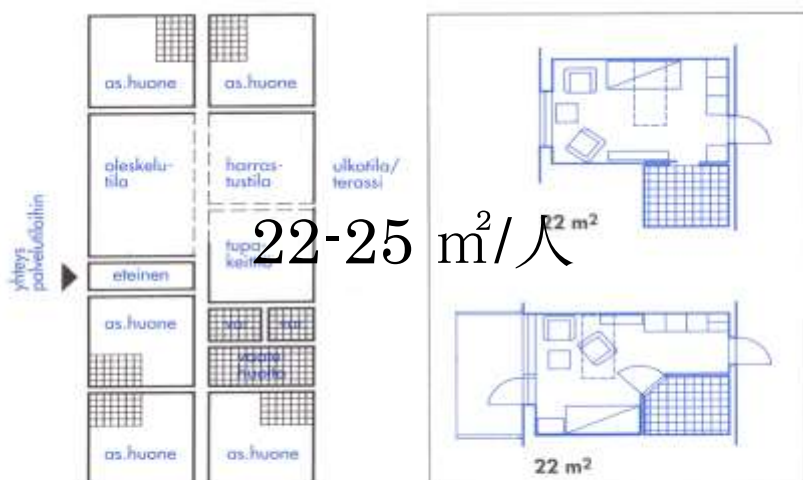
写真 15 : サービスハウス 木造・小型



写真 16 : サービスハウス 大型

2) グループホーム

認知症の方などを対象とするグループホームでは、大体 25 m²を居室、15 m²を共用空間として、1人当たりの面積は 40 m²ぐらいというような考え方です。25 m²ぐらいの居室が 5 室ぐらいで 1 つの生活空間のまとまりをつくり、運営としては 15 室ぐらいの形が、フィンランドでは多く見られます。



Kuva 13. Esimerkki ryhmäkodin perusratkaisusta tilakaaviona.

Kuva 14. Esimerkkejä ryhmäkodin asukkaiden huoneista, 1:200.

図 5 : グループホーム構成例



図6：グループホーム事例

3) サービスハウスの大規模化・複合化

最近の都市部のサービスハウスは大規模化・複合化により、効率的にケアを提供していく方向となっています。更に、様々な会社と連携して、様々な最先端技術を積極的に組み入れて、効率的にケアが提供される、新しい住まいをつくっています。天井から音楽が流れてくるとか、座ると音楽が流れるというプログラムが住まいの中に取り入れられています。便座は赤や黒といった、認知症高齢者にとり視認性の高い色彩にしています。

写真18は比較的自立した高齢者向けのサービスハウスで、バルコニーやサウナがついています。キッチンには全部鍵がかかっています、こういう利用者側の安全性についてシビアなところは、日本との感覚の違いを感じます。庭は囲って、安全性を確保して、地域とのつながりはあまり考えられていないようです。洗濯は全自動で、ボタン一つで洗剤も出てきて乾燥までしてといった、機械でできることはどんどん導入されています。

図7はサービスハウスとサービスセンター、認知症グループホーム、地域の保健センター、



写真17：サービスハウス サニタリー



写真18：サービスハウス バルコニー

小児クリニックが複合したものです。向かい側には薬局やスーパーがあります。地域の小さな町の、真ん中に位置している建物ですが、高齢者にとって、そばにスーパーと銀行、薬局のあることが大事です。プールは高齢者の健康増進のためのエクササイズや、地域の子どものためのベビースイミングなどにも使われています。朝は地域の高齢者が集まってコーヒーを飲みながら時間を過ごすというような場面もあります。



写真 19 : サービスハウス キッチン



写真 20 : サービスハウス 全自動洗濯機

サービスセンター
サービスハウス
グループホーム
地域保健センター



図 7 : WELFARE CENTRE ONNI



写真 21 : WELFARE CENTRE ONNI 内プール



写真 22 : WELFARE CENTRE ONNI の朝